

エスペラント朗詠短歌通信添削 (3)

前田茂樹

エスペラント朗詠短歌募集要項

- 1、一人二首まで
- 2、匿名可
- 3、テーマ自由
- 4、あて先 ノーバ・ボーヨ編集部
〒 621-8686 京都府亀岡市天恩郷大本本部内
FAX 0771-25-0061 e-mail officejo@epa.jp
- 5、作品は添削後誌上で発表

今月も二首、エスペラント朗詠短歌が届いておりますので、皆さまとともに学習してまいりましょう。

作品 A

Ho, ruĝaj folioj!
kovrita de l' nebulo,
dum la pilgrimad'
en "Kamejama Sanktejo"
Dio, plen' sincera preĝ' .

<解説> この作品の作者は、日本語短歌を作られる方で、エスペラント朗詠短歌については、最近始められたと伺っています。この作品もご自身の日本語短歌の作品をエスペラントに訳すかたちで作されたようです。ただ、応募作品が手書きの原稿であるため、こちらで活字にしたものと、スペル（大文字か小文字か）など異なる部分があるかもしれませんがご容赦ください。

すでに度々指摘しておりますように、それぞれの行の文字数と拍子（強弱のリズム）のかたちは、エスペラント朗詠短歌における最も大切な部分で、これが狂うとひなぶりの優雅な朗詠に支障をきたすことになります。

まず、この短歌の一行目には三つの問題点があります。その一つ目はリズム（拍子）、二つ目はシラブルの数、三つ目は行末の拍子です。この作品では一行目のリズムが強強弱弱強弱、シラブルの数が六つ、それに行末の拍子が弱で終わっています。ここまでなら最も基本的な問題として解決できますが、この作品は、感嘆詞 Ho で始まり感

嘆符を同じ行の終わりに置いているため、次の二行目以降との関係も考慮する必要があります。

その上で、はじめに指摘した三つの問題点から解決を進めます。そのためには、一行目の Ho, ruĝaj folioj! を扱う場合、二行目の kovrita de l' nebulo を念頭に置いて考える必要があります。

感嘆詞 Ho ~! のかたちをそのまま生かし、一行目の三つの問題点を解決する場合、以下のような詩句が考えられます。

Ho, ruĝfoliar' ,
kovrita de nebulo,

こうすれば、前述のリズム、シラブルの数、行末の拍子は解決できます。それに、添削前の folioj, kovrita と複数語尾が落ちているのも修正できます。ただ、この後の詩句を考えると、感嘆符ではじまる詩よりも、二行目の詩句を前段にもってきて、Ŝvebas en nebul' とし、二行目を ruĝfoliar' とつづけ、三行目の前置句 dum la pilgrimad' を崩し、pilgrimas と動詞に変えます。そして、三行目を主語 mi からはじめます。

Ŝvebas en nebul'
ruĝfoliar' , pilgrimas
mi en la sankteĵ'

作品の四行目 ” Kamejama Sanktejo” は、エスペラントでは Sanktejo Kamejama あるいは la sanktejo Kamejama と表現するのが普通です。それに、この詩句には en がともなっていますからシラブルの数が八つになっています。三行目を la sankteĵ' としましたが、語尾 o を省略すると朗詠に支障があるかもしれません。その場合、まだ Di-ĝarden' のほうがいくらか朗詠しやすいとも思われます。

さて、四行目にまず de Kamejama、を置くとして、問題は五行目です。日本語の詩句を見ると、「誠の祈り神満ちます」とありますので、おそらく最後の一行でこの詩想を表現するのは困難だったのかもしれません。それで、de Kamejama の次に plena je (de) として神苑に「～が満ちている」という構文をつくり、「誠の祈り神満ちます」という 13 文字を 7 文字につづめて表現するか、あるいは、la sankteĵ' de Kamejama とのかかわりを少し変えて plena を

plenas と動詞にして la diec' をその主語とします。つまり、plenas la diec' の後に kaj preĝas mi と続けば多少は作者の意図に近づけたのではないかと思います。

参考例

Ŝvebas en nebul'
ruĝfoliar' , pilgrimas
mi en la sanktej'
de Kamejama, plenas
la diec' kaj preĝas mi.

作品 B

Piedo en “Mont' Unebi”
la “Utagaki” staris scenejo
kun la “ŝikiŝoj” bril' ,
ĉantad' de l' puraj voĉoj
sen nubiliĝi ĉi tiu mond' .

この応募作品は、朗詠を目的とした短歌ではないため、リズムもシラブルの数も朗詠短歌のそれとはかなり隔たりがあります。ただ、このコーナーの目的は、普通の短歌の添削や評価ではなく、エスペラント朗詠短歌の学習をすることにありますから、少々強引かもしれませんが、この短歌を朗詠短歌に変える工夫を試みます。

まず、シラブルの数や拍子はいったん無視して、全体の意味をとらえるため、詩句を文章化してみたいと思います。

一行目は、Sur la piedo de Monto Unebi (敵傍山の麓に)、二行目は、la Utagaki (Utaaltaro) staris sur la scenejo (舞台に歌垣が設けられています)、三行目は、kun la ŝikiŝoj, kiuj brilas (歌垣の上の色紙が映える)、四行目は、ĉantado de la puraj voĉoj (清らかな詠唱)、五行目は、sennubiliĝas ĉi tiu mondo (清らかな朗詠にこの世の雲が晴れる)。

これで全体の意味が大体つかめたのではないかと思いますので、朗詠短歌の創作に移ります。

まず、一行目ですが、詩全体の内容と調子、それに五シラブルで行末を強拍で終わらせなければならないことを頭の中で再度確認しておきます。その上で、行の最初に Jen を置き Jen sur la pied' と

すると、五シラブル、強弱のリズム、行末を強拍で終わらせるという三つの問題点を解決することができます。二行目は畝傍山が必要ですから de l' mont' Unebi として、次に staras という動詞を置きます。そして、三行目には、la Utaaltar' をもってきます。固有名 (Utadaki) に冠詞 la は置かないのが普通ですから、Utadaki は四シラブルとなり、この行では使えません。ここまでを整理してみましょう。

Jen sur la pied'
de l' mont' Unebi staras
la Utaaltar' ;

「畝傍山の麓に歌祭りの歌垣が立っています」

三行目の行末は punktokomo で軽く文をくぎります。これは原文のように kun を使った前置句で表現するより、ここでは新たに文を起こすほうが歌としても簡潔になると思うからです。したがって、四行目は、sikiŝoj brilas, sonas と五行目につながる形を作っておきます。そして、最後の五行目は、ĉantoj kaj heliĝas mond' とします。全体を整理してみましょう。

Jen sur la pied'
de l' mont' Unebi staras
la Utaaltar' ;
Ŝikiŝoj brilas, sonas
Ĉantoj kaj heliĝas mond' !

作者の言いたいことを全てうまく表現できたとは言えませんが、すくなくとも朗詠できる短歌にはなったと思います。これは日本語の短歌においても同じことですが、三十一文字という限られた文字数の範囲で言いたい詩想を表現するには、必要な単語と省いてもよい単語の精査は大切な作業の一つです。とくに、エスペラントの朗詠短歌は、シラブルの数、リズム（拍子）のかたちなど、守らなければならない制約があり、決してやさしいとは言えません。それだけに、自らの作による献詠歌が八雲琴にあわせて朗詠されるとき喜びは何ものにも勝るものがあります。エスペラントの歌祭りは世界平和を祈る神事でもあります。一つでも多くの応募作品をお待ちしております。